

# ら は た 訪 探 史 クラブ 其の60

渥美半島に  
人が暮らし始めたころ

定住を始めた人たちの生活に、大きな変化が訪れました。環境の変化です。寒冷期を境に温暖化が進み、海水面が上昇。魚貝類が豊富に生息できる内湾が発達し、人々は水産資源を活用するようになりました。また、植生は広葉樹林から現在と同じような照葉樹林へ、動物もナウマンゾウなどの大型獣からニホンジカ、イノシシなどの中・小型獣に変わりました。こうして、海と森の資源に恵まれた日本列島が誕生し、このこ



宮西遺跡全景

る、海に囲まれた独特の地勢を持つ渥美半島も出来上がったのです。そして、その激変する時代、大久保町の宮西遺跡は、全国でもまれにみる人々の生活が営まれていた場所だったのです。

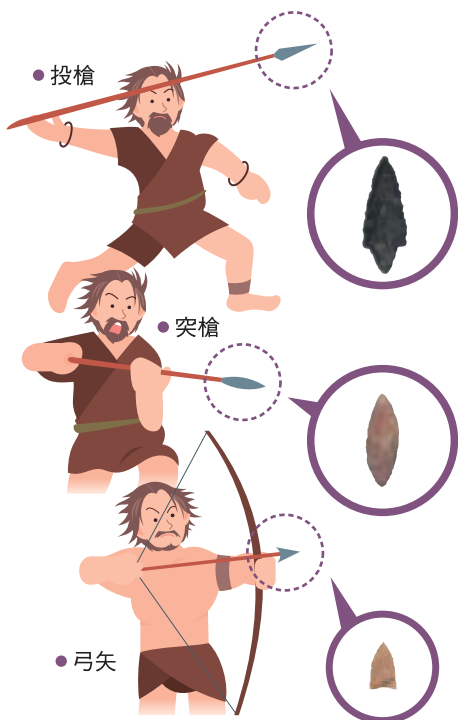
宮西遺跡では、膨大な数の石器や石屑のほかに、当時の狩猟具である石の槍先も製作されていたことがわかっていきます。

狩猟具には3段階の移り変わりがあるとされています。初めは、突き刺すための「突槍」。次に、投げつけて「投槍」。そして、縄文時代に発明された、弓を使う「弓矢」。先端につける槍先も同じで、「大きなもの」「小さなもの」、そして「矢尻」へと変化していきました。

「突槍」は、槍先が大きいので殺傷能力がある反面、命がけて獲物に近寄る必要があります。先端が軽い「投槍」は、遠くの獲物を射止めることができますが、殺傷能力は低くなります。「弓矢」は反動を利用し、獲物に気づかれないことなく遠くから射止めることができますが、小さいため、殺傷能力は劣ります。

それぞれに長所、短所がある狩猟具の移り変わりは、温暖化の影響を受け、大型のものから、すばしっこい中・小型のものに変化した。獲物への対応であるといえるでしょう。そして、宮西遺跡は、これら「突槍」「投槍」「弓矢の矢尻」が発見されていることから、ちょうど狩猟具転換期の時代にあつたことがわかります。

その槍の製作に使われた石ですが、渥美半島にあるものばかりではなく、明らかに他の地域のものがありました。このことから、他の石材産地との



交易があつたことがわかります。すると、槍先もどこかに運ばれたことが想像でき、つまり、「モノ」が動くということは、石器製作技術を含む文化の交流があつたといえるのです。

このように、人々が槍先などの石器を作っていた痕跡を残す宮西遺跡。しかし一方では、生活にかかわる炉と思われるものや、煮炊きに使った土器も見られています。果たしてここは、この時代の槍を製作した集落の跡なのか…。それとも、豊富な獲物を獲ることができた狩猟場所だったのか…。それについては、まだわかっていません。(増山)

文化財課 23局3531